

資料に対する委員からの主な意見及び事務局回答

主な意見	事務局回答
資料1	
令和元年産及び令和2年産における水稻の作柄については、特に四国・九州周辺で作況指数が不良となった県が多くなったところ、令和3年産では全国的に概ね平年並みであった。 令和3年産のトビイロウンカの被害については、令和2年産より少なかったとのことであるが、要因として気象条件の違いもあることが推察されているため、今後も留意していく必要がある。	年産ごと、地域ごとに作柄の違いとなる要因（気象条件、病虫害の発生状況など）については、引き続き十分に注意しながら今後の調査を実施してまいります。
資料3	
前年から変動した5道県の前年産対差は、1.70mmのふりい目幅及び多くの農家等が使用しているふりい目幅のいずれも富山県を除いては同数値となっている。 その他の都道府県をみると、複数の府県で1.70mmのふりい目幅では前年産対差なしとなっているものに対して多くの農家等が使用しているふりい目幅では減少となっている。 1.70mmのふりい目幅と多くの農家等が使用しているふりい目幅での前年産対差の違いの要因は何か。	1.70mmのふりい目幅の平年収量は、直近30年の実収量から気象効果を除去し補正した10a当たり収量の趨勢から算定しています。 一方の多くの農家等が使用しているふりい目幅の平年収量は、1.70mmのふりい目幅の平年収量に気象要因等の変動を含む実収量から算定した都道府県別の最大シェアのふりい目幅別重量割合（5中3移動平均7中5）を乗じて算定しています。 このような算定方法の違いが差の要因として考えられます。 また、全国的な傾向として多くの農家等が使用しているふりい目幅の平年収量が1.70mmのふりい目幅に比べて減少となっていることについては、近年、主産地では大きな冷害や生育遅延もなく出穂前の気象に恵まれ、比較的全もみ数の確保が容易であった一方で、生育の前進化による登熟期の高温が登熟に影響を与えたことが考えられるほか、西日本では台風やウンカなどの被害が多く登熟に影響を与えたことが考えられます。 こうした1.70mmのふりい目幅と多くの農家等が使用しているふりい目幅の平年収量の差、傾向の違い等の要因については、引き続き十分に注意しながら今後の調査を実施してまいります。
資料4	
【長崎県】 近年の収量の推移を見る限り、平年収量の3kg増加に違和感がある。	長崎県については、平成30年産から高温の影響を受けやすい「ヒノヒカリ」から高温耐性があり「ヒノヒカリ」よりも収量水準の高い「なつほのか」へ作付転換が始まり、令和元年産は平年収量を2kg上昇させたところでした。 その後も順調に作付転換が進み、「なつほのか」の作付けが増加していましたが、近年は台風やトビイロウンカの被害によって作況指数が低下する年が続く（令和元年産94、令和2年産86）、特に昨年は気象要因以上にトビイロウンカによる減収幅が大きく、「なつほのか」への作付転換による増収効果の見極めが非常に難しく、算定結果においても令和2年産、3年産の平年収量は据え置かれたところでした。 今回、令和4年産についても引き続き作付転換が進むことが見込まれることから、令和3年産から3kg増加と算定されたところでした。